

Title	「猪」「豚」に関することわざ：「猪」「豚」をどう捉えてきたか
Author(s)	馬場, 俊臣
Citation	札幌国語研究, 26: 29-43
Issue Date	2020-12
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/12098
Rights	

「猪」「豚」に関することわざ ——「猪」「豚」をどう捉えてきたか——

馬場 俊 臣

1 はじめに

「ことわざ」は、古くから言い伝えられてきた、教訓・風刺・真理などを含んだ短い言葉であり、様々な事物に対する人々の見方や捉え方が反映されている。

馬場（2010）～（2020）では、「牛」「虎」「兎」「龍」「蛇」「馬」「羊」「猿」「鶏」「犬」に関する日本のことわざを取り上げ、ことわざに反映されたそれぞれの動物に対する人々の捉え方の特徴を見た。本稿では、「猪」に関することわざを取り上げ「猪」に対するどのような捉え方が表されているかを示したい。また、本稿では、「猪」だけでなく、「猪」を家畜化した「豚」に関することわざも併せて取り上げ「豚」に対する捉え方も示したい。

本稿で取り上げることわざは、『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』（北村（編）2012）に基づいている。同書「付録 全文データ収録 CD-ROM」の「見出しキーワード」検索によれば、「猪」「豕」をキーワードとすることわざは14句¹（俗信・俗説、言葉遊び・しゃれ、慣用句、故事を含む）ある。また、「豚」をキーワードとすることわざは11句（同前）ある。「猪」「豕」だけであれば、十二支の動物名を含むことわざの中では最も少ない。また、「豚」も含めれば、「羊」の22句に次いで少ない。

猪²は、ユーラシアとその周辺の島、アフリカ北部にもともと生息しており、北アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドには人間により移入された。日本には、「第四紀の地質時代に日本列島が朝鮮半島と陸続きだった頃、大陸から渡来した」（黒澤2001：16）とのことである。猪は古くから狩猟の対象となっており、縄文時代や弥生時代の遺跡から多くの猪の遺骨が発掘されており（田中2001：1）、現在でも年間4万～7万頭が狩猟されている。猪は、田畑の作物を食い荒らす害獣でもあるが、肉は古くから食用にされ、また、剛毛はブラシなどに利用され皮はなめして敷物などに利用されるなどさまざまな用途で利用されてきた。

猪を家畜化したものが豚である。ヨーロッパ、西アジア、中国などで別々にそれぞれの土地の猪から食肉用に家畜化された。猪と豚はともに哺乳綱偶蹄目イノシシ科に属するが、形態の変化

¹ 「猪（い）」「猪（しし）」「猪（いのしし）」「豕（いのこ）」の合計である。

² 以下の「猪」「豚」に関する記述の中で出典の記載がない内容は、『日本大百科全書（ニッポニカ）』（「イノシシ」「ブタ」の項目）に基づく。

が見られる。豚の吻³は著しく短縮して上方へしゃくれ、犬歯も小さい。耳は垂れ下がっているものが多く、尾も短く巻いている。胴が伸びて前軀に比べ後軀の発達著しい。猪は野山を駆け回るため前軀が発達しているのに対して、豚は「多くの肉を得るために改良が加えられた結果、ハムとよばれる尻と腿の部分が発達し、ロースやベーコンとよばれる背と腹の部分が長くなって、前軀の割合はイノシシの半分以下になった」（田中 2001：20-21）とのことである。

日本では、豚は、江戸時代の末にごく一部の地域で飼われていたが、本格的に全国で飼われるようになったのは明治時代中期以降である。特に大正期の関東大震災以降、「栄養源として豚肉食が推奨」（濱田ほか 2015：73）され全国に広まった。

なお、中国語（漢語）の「豕」は「ぶた」の姿をかたどった象形文字であり、「猪」「家猪」「豚」は「ぶた」である⁴。「猪肉」は「ぶたにく」であり、西遊記の「猪八戒」は「いのしし」ではなく「ぶた」と人間の生まれ変わりである。「いのしし」は「野猪」である。

十二支の「亥」も、中国や韓国では「ぶた」を指す。「韓国や中国の亥は、家畜の豚で定期的供給できる食糧源であり、だからこそ富の象徴でもある。」（濱田ほか 2015：75）のに対し、「日本人にとって十二支の亥は、野生の猪を示し、山の神のイメージにも結びつけられることが多い。」（濱田ほか 2015：72-73）とのことである。

さて、「猪」「豚」に関することわざは、「遼東の豕（いのこ）（見聞が狭いため、世間にありふれていることを知らず自ら得意になっているようす。）」「猿を柙中に置けば豚（ぶた）と同じ（猿を狭い檻の中に入れておけば、本来のすばしこい性質を発揮することができず、豚と同じような存在になってしまう。能力のある人も、その能力を発揮できるような条件を与えなければ、無能な人間と変わりがない。）」など中国の故事に基づく成語も知られている。また、「豚（ぶた）に真珠（豚に真珠を与えても意味がない。価値の分からない者には貴重なものを与えても何の役にも立たない。）」「うるわしき女の慎み無きは金の環の豚（ぶた）の鼻にあるが如し（女性には慎み深さが最上の徳である。）」「豚（ぶた）を盗んで骨を施す（大きな悪事を働いて、償いに僅かな善行をする。）」などのように聖書など西洋のことわざに由来するものもある。本稿では、日本のことわざを対象とするため、中国の故事成語などに基づくことわざは取り上げない。本稿では、「猪」「豚」に関する日本のことわざ⁵を見ていく。

以下、猪・豚に関することわざにおいて注目された猪・豚の特徴を分類し、ことわざを例示していく。なお、ことわざの後の（）内に示した解釈は『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』に基づいている。関連する情報も随時補う。

³ 動物の口付近で、突出していたり伸縮できたりする部分。

⁴ この段落の内容は、福井（2006：3-8）による。

⁵ 『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』（北村（編）2012）に漢籍類及び西洋での出典が示されていない表現を日本のことわざとみなす（俗信・俗説等も除く）。

2 猪・豚に関する日本のことわざ

(1) 全体的特徴

(ア) 大きい

①山より大きな猪（しし）（いのしし）は出ない（誇張が限度を越えている。相手の話が上げすぎ。容れ物より大きな中身はない。）

猪の大きさに関しては、「オスの体長は約一・五メートル、肩高は約八十センチ、体重は約百キロ」（福井 2006：46）、「ニホンイノシシ（体重 60-120kg）」（田中 2001：13）とのことである。

(イ) 危険・怖い

①射殺した猪（しし）（どんな恐ろしいものでも、死んでしまえば怖くない。）

②猪（いのしし）の手負い（大変気が立って危ないようす。）

猪が狂暴かどうかに関しては、「繁殖期の雄は気が荒くなるが、イノシシは非常に学習能力が高く（中略）、扱い方に注意を払えば肉食獣のような凶暴さはなく、困難とはいえ飼育しやすことが可能で、とくに幼齢期から飼育することでヒト馴れもしやすい。」（田中 2001：17）とのことである。

猪に出くわしたときの対処法については、「普通、イノシシが人と出会えばイノシシのほうから逃げてくれるのであわてる必要はないが、イノシシの人に対する反応は発情期や分娩の後では攻撃的になる（Eguchi *et al.*, 2000a⁶）ので注意が必要である。特に親がウリボウを連れているときはゆっくりその場から離れること。急に走り出して、イノシシを興奮させないこと。後ろを向くと襲ってくることもあるのでなるべく背中を見せないこと。ウリボウを見かけても近寄らないこと、そばに親がいる可能性が高い。茂みからいきなり突進されたら成す術がない。成獣が一頭で出てきても背後の茂みに子がいる場合もあるので、むやみに近づかないこと。たてがみを逆立て、明らかに威嚇しているとわかる状態でも、シュー、カッカカッ、クチャクチャという音をイノシシが発していたら気をつけること。イノシシの威嚇音である。」（江口 2001：197）とのことである。

豚にも様々な種類の鳴き声がある。「もっとも特徴的でよくみられるものとして、母ブタと子ブタの授乳・吸乳時の鳴き声がある。授乳時の母ブタは必ず「グウグウ」という特有の声を出し、横たわっていてもこの声を出していないときには、乳は出ていないという。また、子ブタはそれに先だって乳をねだる甲高い声を発する。子ブタは吸乳中にも断続的に鳴くが、このときの声は持続時間や基本周波数、ピッチなどの違いから少なくとも、「クローキング croaking」（おもに吸乳開始時に発せられる短くガーガー鳴く声）、「ディープ・グラント deep grunt」（吸乳期間中を通じて発せられる短い単調な声）、「ハイ・グラント high grunt」（deep grunt に似ているが、基本周波数が高い）、「スクリーム scream」（子ブタどうしが乳頭を争う際に発せられる長いギャー

⁶ Eguchi, Y., T. Tanaka and T. Yoshimoto (2000): Behavioral responses of Japanese wild boars to the person in attendance during the pre- and post- farrowing periods under captive conditions. *Animal Science Journal*, 71, 509-514.

ギャー鳴く声)、「スクウィーク squeak」(screamと同様に闘争時に発せられるが、ピッチの変化が少ないキーキー鳴く声)の5種類に分類されるという(Jensen and Algers 1983/84⁷)。そのほか、成熟したブタの鳴き声は、英語では「グラント grunt」(通常のブーブー鳴く声)、「バーク bark」(吠えるような声)、「スクウィール squeal」(甲高い悲鳴、ときには112dBもの音量を出すという)などの用語で表現され、それぞれニュアンスが異なる。それらが表す意味としては、空腹や渴きを訴える声、警戒の声、恐怖時の声、子ブタをよんだり世話をするときの声、敵対行動時の声、性行動時の声など、それぞれ異なる特有の鳴き声が20種類以上に分類されている(Kilgour and Dalton 1984⁸)。(田中2001:63)とのことである。

なお、猪の牙(犬歯)に関しては、(猪のオスは)「下顎の犬歯が発達し、大きな牙となって、口外に突き出している。(中略)牙は、長いものでは約十五センチにもなり、磨耗しても終生伸び続ける。一方、メスは、オスよりも一割ほど小ぶりで、牙も小さい(このため、メスは敵と戦う時、牙で切ったり突いたりするよりも、むしろ相手に噛みつこうとするらしい)。なお、イノシシは、上顎の犬歯も(下顎ほどではないが)発達している。そして、この上顎の犬歯と常に擦れ合う恰好で、下顎の牙が後方へ湾曲するように伸びている。このため、牙は放っておいても自然に研ぎ澄まされることになり、これで襲われた敵のダメージは、深刻である。猟犬ならば一閃で腹を裂かれるだろうし、人間ならば、脚を骨に達するくらいまで深く、ザツクリと斬られてしまう。

(中略)ちなみに、イノシシを家畜化したブタにも、イノシシほどではないが、牙はある。ただ、ブタの場合、牙を放置しておく、他の個体や世話をする人間を傷つける恐れがあるなど、畜産管理上、何かと不都合が多いので、生後まもなく、人為的に切除される。」(福井2006:46-47)とのことである。なお、「イノシシの雄には長く伸びた牙があるが、これは護身用で後ろに反っているため、相手を襲うのにあまり効果はない。」(仲谷2001:209)と書かれた文献もある。

(ウ) 臭い

①猪(いのこ)を抱いて臭きを知らず/豚(ぶた)を抱いて臭きを知らず(自分の身に付いてしまったにおいては、自分ではなかなか気が付かない。自分の欠点には気づきにくい。)

②猪(いのこ)を憎みて臭きを愛す(おおもとを憎んでいるのに、それから派生する事柄には寛大である。考えが不合理で一貫しない。)

臭さの原因に関しては、「ヌタ打ち」「牙かけ」「こすりつけ」が関わっているそうである。「イノシシの習性でいまひとつ特筆すべきものは、「ヌタうち」である。(中略)山野の窪地で水の沸き出たような場所(「ヌタ場」)に於いて、イノシシが泥浴びをすることを「ヌタをうつ」という。

「ヌタ」とは、「ニタ」とも言い、湿地のことである。(中略)イノシシがなぜ「ヌタをうつ」のかは、実はまだはっきり分かっていない。「犬が近所の電柱の根元に放尿するのと同じで、自分のおいを残すため」、「山野を駆け巡って火照ったからだを泥水に浸し、体温を下げるため」、「体

⁷ Jensen, P. and B. Algers. 1983/84. An ethogram of piglet vocalizations during suckling. *Appl. Anim. Ethol.* 11: 237-248.

⁸ Kilgour, R. and C. Dalton. 1984. *Livestock Behaviour*. 1st ed. Granada, London.

について「マダニやヒルなどを落とすため」など、さまざまな説が出されているが、決め手はない。いずれにせよ、体重百キロもあろうかという巨漢が、浅い泥水のヌタ場で、ゴロゴロと転がりながら、バシャバシャと泥浴びをするさまは、なかなかの壮観である。（中略）イノシシはヌタうちが済むと、斜面を駆け上がり、太い樹木の根元へ行く。好むのは、松の樹である。適当なやつを見つけると、その幹にゴシゴシとからだを擦りつけ、体表の泥を落とす。そして、やがては鋭い牙で、幹をガリガリと切り裂く。これを「牙かけ」という。幹の傷口からは、松脂がドロリと滲み出てくる。それにまたしてもからだを擦りつけ、今度は松脂を体表に塗りたくる。これを「こすりつけ」という。これらの行為の目的は「ヌタうち」同様、よく分かっていない。自分の存在の誇示、あるいは個体間のおいによるコミュニケーション…色々なことが言われている。唇付近から出る分泌物と体臭が、次に来たイノシシに何らかの作用をもたらすのである。」（福井 2006：75-77）とのことである⁹。

豚が本当は清潔好きであることに関しては、「現代の豚の飼育場は非常に清潔で、いつもシャワーで洗われていて、豚自身も自分から水浴びする清潔好きな動物だ。」（江口 2003：168）とのことである。なお、「ブタは、一定の場所に排糞尿をする、いわゆる「ため糞」の習性をもっている。この習性は祖先種のイノシシから受け継がれ維持されているもので、野生の状態では一般に、水たまりや川縁など低地の湿った環境のところが排泄場となる。通常の飼育環境でも同様に、低くて湿った場所に排泄し、高くて乾燥した場所が寝床となる。したがって、豚舎設計においては、排泄場と寝床が区別できるように施設設備を配置することが重要となる。しかし、いくら豚舎の構造が適切でも、飼育密度が高すぎると排泄場で休まざるをえない個体が出てくるし、その汚れた個体が今度は寝床部分にきてそこも汚してしまうと、けっきょくは排泄場と寝床が一緒になってしまうことになる。このように、ブタは本来、ベッドルームとトイレはけっして一緒にはしないという清潔好きな動物であるにもかかわらず、一部で不潔な動物の代表のように誤解されているのは、豚舎設計や管理の不適切さによるものであり、ブタには罪はなく、気の毒な話である。」（田中 2001：80-82）とのことである。また、「酷暑期」には暑さを避けるため「水や泥をからだ全体に塗りつけ、蒸発による熱放散を行う姿もよくみられる（水浴、泥浴）。この行動は、「ヌタ（沼田の意）を打つ」あるいは「ノタ打ち」などとよばれ、野生のイノシシから受け継がれた行動」であるが「飼育下では、水や泥がない場合には糞尿をそれらのかわりに用いるので、これが「ブタは不潔だ」との誤解の原因となる。したがって、くどいようだが、前述のとおり排泄場と休息場を分けると同時に、夏場の風通しや水場の工夫によって、ブタは本来の清潔な状態を保てるのである。」（以上、田中 2001：83-84）とのことである。

（エ）愚鈍・無能

- ①豚（ぶた）の木登り／豚（ぶた）の軽業（不格好で、危なっかしいようす。）
- ②豚（ぶた）もおだてりゃ木に登る（取り立てて能力のない者でも、まわりからちやほやされる

⁹ 豚の匂いに関しては、本節「(3)行動 (イ)掘る」も参照されたい。

と思ひもよらないことをやってのける。)

③豚（ぶた）に念仏（大切なことをいくら聞かせても、何の効果もなく無駄であること。)

猪の能力に関しては、「私はこれまで、自然環境下に生息する野生のイノシシや、人に飼育されたイノシシ、筆者が自ら育てたイノシシを詳しく観察、実験してきた。イノシシに受け入れてもらうことで、これまではなかなか見せてくれなかった行動や能力がいろいろ発見できた。頭が良いとされているイヌなどの動物にも劣らない学習能力（中略）を示してくれたのである。（中略）これまでのイノシシのイメージを一新してもらい、イノシシは繊細で、頭が良く、力強い動物であることを理解して欲しい。」（江口 2001：172）とのことである。例えば、色覚能力に関する実験では、「イノシシは赤・青・緑の三原色のなかで青を識別でき、緑についてもある程度識別可能であることが示唆された。この結果をふまえて黄緑から赤紫にいたる八種の有彩色を新たに追加して試験を行ったところ、イノシシは青・青紫と紫の一部について明確に識別でき、色が赤や緑に移行するにつれ見えにくくなる結果が得られた。また、イノシシは試験終了後六カ月を経過しても実験の手法をすべて記憶していた。学習した事柄をかなりの長期間保持する事ができるのである。」（江口 2001：182）とのことである。

豚の能力に関しては、「ブタは、管理者が給餌の準備を始め、その音が聞こえると、たとえその姿がみえなくてもそわそわとし始め、餌を要求する声を出す。この行動は、パブロフのイヌと同様に、毎日同じことが繰り返されるうちに、音がすれば餌がもらえるという、音＝餌の関係を学習していることを意味する。（中略）鼻でペダルを押すと水が出てくるウォーターカップなど、飲水や摂食などになんらかの操作が必要な装置に対しても、ブタは比較的短期間で学習し、苦もなく使いこなす。（中略）イノシシやブタは、刺激と強化（報酬または罰）あるいは操作と強化とを連合させるいわゆる連合学習（associative learning）とよばれるものを、比較的容易に成立する程度の学習能力を備えている。」（田中 2001：68-69）とのことである。

（オ）獲物

①しし見て矢を矧ぐ（目前に危険が迫って初めて対策の準備にとりかかる。手遅れである。)

②天然礫に猪（しし）を打つ（偶然に飛んできた石が猪を打ち倒して獲物を得る。思いがけない幸運にありつく。)

猪や豚が食用とされてきた歴史については¹⁰、縄文時代には猪は重要な食料とされ、猪は豊かな実りを願う神としても人々と関わっていたと推測できる。弥生時代以降、豚が大陸からもたらされた。奈良時代以前より獣肉の食用は禁止されたが、猪の食用は続いた。江戸時代にも、庶民は猪や鹿を食べており、大名屋敷ではさらに多くの獣が食されていた。

猪の肉は「山くじら」「ぼたん」などと呼ばれる。味噌を使って鍋にすることが多く、「猪（しし）鍋」「ぼたん鍋」などと呼ばれる。「山くじら」に関しては、「猪の肉。また、一般に獣肉の異称。獣肉を食べるのを忌んで、いいかえたもの。」（「やまくじら」『日本国語大辞典 第二版』）と

¹⁰ この段落の内容は、新津（2011：161, 169-170, 173）による。

のことである。また、「ぼたん」に関しては、「（「獅子に牡丹¹¹」の「獅子」を「猪」にとりなしていう）猪肉の異称。」（「ぼたん」『日本国語大辞典 第二版』）とのことである。しかし、「ぼたん」は、「牡丹に唐獅子」という言葉をもじったシャレ言葉で、シシという呼び名に引っかけたものと解釈している人もいるが、本当のところは今もわかっていない。（石島 2006：146）、「ぼたん鍋」の名称の由来については、「肉食の禁止というタブーをおかして食するにあたって、そのものズバリの『イノシシ』という語を使うのが憚られたため、肉の色がその花の色に似ている植物「牡丹」が隠語として選ばれた」、「薄切りにしたイノシシの肉片を大皿に美しく盛りつけた様子が、牡丹の花のようであるから、名づけられた」、「薄切りのイノシシの肉片を鍋で煮込んだ際、肉片が熱でちりちりと縮んだ様子が、牡丹の花弁に似ているから」など、諸説が飛び交い、決定打がない。（福井 2006：111）とのことである。なお、「ぼたん鍋」は、朝日稔氏によれば、兵庫県篠山町が発祥地とされている。明治年間、この町におかれていた陸軍の部隊で訓練と称して捕獲したイノシシの肉を味噌汁にして分配していたが、その料理を将校用にアレンジしたものがそもそもの初めだそうである（アニメ、^{（ママ）}一八一号、一九八二「人間とイノシシ」¹²）。（石島 2006：146）、「由来についても、はっきりしない。「一九〇〇年代の初め、丹波篠山に駐屯した帝国陸軍の兵士たちが、地元名産のイノシシ肉を味噌仕立ての鍋料理にして食べ始めたのが起源」とよく言われるのだが、どうであろう。」（福井 2006：111）とのことである。

猪の肉の食感や栄養、匂いなどに関しては、「一般的にイノシシの肉は煮込んでも硬くならないといわれるが、実際はどうなのだろう。岸田ら（一九八三 a）¹³は、ブタ肉とイノシシ肉について比較している。それによると、ブタ赤身肉は加熱処理により約五・四倍の硬さになるのに対して、イノシシ赤身肉は三・九倍と煮込んでも硬くなりにくいという結果が出ている（中略）。白身肉（脂質）に関しても岸田ら（一九八三 b）¹⁴は、生肉、加熱処理後ともにイノシシ肉の方が柔らかいという結果を出している。また、肉の風味には脂肪の含有量が関係すると考えられており、その融点も低い方がおいしいといわれている。ブタ肉とイノシシ肉の脂質の融点は、ブタ肉が三〇から三四度なのに対して、イノシシ肉は二八から三〇度とやや低い。さらにイノシシ肉は多汁性と柔らかさを感じ、咀嚼性もブタ肉と比べると小さく、より食べやすい（中略）。これらは、イノシシ肉を食したときにあっさりした食味をおぼえることと関係があると岸田らは述べている。」

（赤星 2001：291-292）、「ぼたん鍋を食べると、体が芯からあたたまり、滋養がたっぷりつくといわれている。ぼたん鍋一人前の総カロリーは約八二〇キロカロリーである。また松本ら（一九九七）¹⁵は、人体に対するイノシシ肉の効果を実験により指摘している。それによると、血清中性

¹¹ 「獅子の堂々たる姿に、絢爛豪華な牡丹の花を配した図柄。また、そのさま。転じて、とりあわせ、配合のよいことのたとえにも用いる。牡丹に唐獅子。」（「しし」『日本国語大辞典 第二版』）。

¹² 朝日稔（1982）「人間とイノシシ」『アニメ』118、平凡社、pp. 44-45

¹³ 岸田忠昭・浜野孝・三ッ橋幸正・平松直子・松木幸夫（一九八三 a）：兵庫県におけるイノシシとブタの赤身肉の成分分析の一例、姫路短期大学研究報告 二八、八四-八八頁

¹⁴ 岸田忠昭・浜野孝・三ッ橋幸正・平松直子・松木幸夫（一九八三 b）：兵庫県におけるイノシシとブタの自身肉（脂質）の成分分析の一例、家政学雑誌 三四-一、五八-六一頁

¹⁵ 松本義信・武政睦子・小野章史・松枝秀二・守田哲郎（一九九七）：ヒトにおけるイノシシ肉の効果、川崎医療福祉学会誌 七-一、二一七-二二〇頁

脂肪濃度ならびに血清総コレステロール濃度が高値を示す人がイノシシ肉を摂取することで、それらの濃度を低下させるような何らかの影響を受けることが示唆されるとしている。」（赤星 2001：292）、「イノシシの肉は、くさみがあって苦手とする人も多い。これは肉のなかでも主に脂肪に由来するものである。脂肪には体構成脂肪と貯蔵脂肪がある。このうち貯蔵脂肪は餌に含まれている脂肪に左右される。肉の風味などは各種成分が総合されたものであり、また個人の好みが大きく影響する。イノシシ肉のにおいを、野生のにおいといって好む人もいる。」（赤星 2001：292-293）とのことである。

（カ） 豕（いのこ）

① 馴染みでは猪（い）の子（こ）も可愛（かわい）（傍に置いて馴れ親しむと猪の子であっても可愛くなる。どのようなものでも近くにいて馴れ親しむと情が移る。）

猪の子を指す「うりぼう、うりんぼう、うりんぼ」（「瓜坊」）に関しては、「子の淡褐色の体には、黄白色の縞が水平方向に数本あり、保護色となっている。そのようすがウリに似ているところから瓜坊（うりぼう）とよばれる。この縞模様も、最初の永久歯が生え出す生後5か月ごろには消え、親のような剛毛に変わる。」（「イノシシ」『日本大百科全書（ニッポニカ）』）、「イノシシの子には生後しばらくの間、瓜坊（うりぼう）とよばれるように縦縞があり保護色の役目を果たしているが、改良されたブタの子にはみられない。」（「ブタ」『日本大百科全書（ニッポニカ）』）とのことである。

なお、猪と豚の毛色に関しては、「イノシシの毛色は濃淡の差こそあれ、ほとんどが褐色であるのに対して、ブタでは褐色でも赤に近いものや、黒色、灰色、白色（淡桃色）、あるいは白地に黒斑や赤斑があるもの、黒地に白帯のあるものなどさまざまである。これは、野生では突然変異などで本来のものと異なった毛色の個体が生まれると、めだつことによって天敵に捕食される確率が高く（これはイノシシに限らず、すべての動物種にいえることではあるが）、淘汰されやすいのに対して、人為環境のもとではひとつの特徴として次世代にも受け継がれ、固定されることによる。野生では、ウリボウとよばれる幼齢イノシシの縞模様が保護色となっているが、ヒトの管理下にあるブタでは天敵の心配もないので、この形質は失われていった（正田 1987¹⁶）。」（田中 2001：20）とのことである。

猪が多産であることに関しては、「3～8頭（平均5.4頭）の子を産む」（「イノシシ」『日本大百科全書（ニッポニカ）』）、「一回の出産で生まれるのは、平均四、五頭。（中略）栄養条件などの環境に恵まれると、七、八頭生まれたりすることもあるらしい。（中略）これだけ多数の子どもをいちどきに産むのだから、生まれ出て来る子どものサイズは、当然ながら、ごく小さい。体重は四百～五百グラムというところだろう。体力的にも、ひ弱である。生後三ヶ月くらいで乳離れするのだが、生存率は約五割だという。逆に言えば、それだけ死亡率が高いから、子孫を確実に残すためには、一度の出産でたくさん生まねばならないのである。（中略）（ニホン）イノシシの幼獣

¹⁶ 正田陽一、1987. 人間がつくった動物たち. 東京書籍, 東京.

も、他の獣の恰好のエサになる。キツネやタヌキなどが彼らを襲う。また、意外に盲点なのが空からの攻撃で、大型の猛禽類が突如飛来して、イノシシの子どもをかつさらっていくことも珍しくない。」（福井 2009：53-54）とのことである。

また、豚についても、「ブタは周年繁殖が可能なので、1年に2-2.5回の分娩により20-30頭もの子が生まれる。」（田中 2001：22）とのことである。

ちなみに、猪の寿命は「野生のもので約五年、飼育されたもので約二十年と言われている。」（福井 2009：56）とのことである。

（キ）変わらないもの

①猪（いのしし）も七代目には豕（いのこ）になる（変わらないように見えても、長い年月の間にはそれなりに変化がある。）（「豕」は豚のこと。）

「七代（しちだい）」は、「七つの世代。転じて、長い年月。永久。」（「しちだい」『日本国語大辞典 第二版』）の意味であり、「坊主だませば七代崇る」（僧侶をだますと子々孫々にまで災いが及ぶ。）などのことわざもある。「七代」は「七生（しちしょう）」とも言う。「七生」は、「仏語。人界および天界に七度生まれ変わる。預流果の聖者は七生を限って、以後の生はないとする。転じて、未来永遠。七代。」（「しちしょう」『日本国語大辞典 第二版』）の意味である。

猪が豚にまで変わる世代に関しては、猪から豚への変化の過程を調べるために猪に豚を交配する「累進交雑実験¹⁷」が行われ、「腸の長さなど生体機構上の変化と生産形質¹⁸の変化との関係」などが明らかになっており、猪から5代ではほぼ豚の形質に変化することが示されている（田中 2001：22-23）。

豚から猪に戻るかどうかに関しては、「日本で豚を野に放った場合 放たれた豚は突然イノシシになることはなく、豚として一生を終えるが、その豚がイノシシと交配して残した一代目の子孫はイノブタとなる。さらにそのイノブタがイノシシと交配して子孫を残せば、見ためにはほとんどイノシシとなり、やがて豚の血は薄れてイノシシ集団の中に吸収される。つまり、長い目で見た場合、イノシシがいる地域で放たれた豚はイノシシになってしまう、といえる。」「イノシシのいない地域に豚を放った場合 オーストラリアにはイノシシは分布していないが、野生化した豚がいる。この豚は1788年、イギリスによる開拓が始まった時に他の家畜と共に持ち込まれたのが始めとされている。（中略）現在、オーストラリアで見られる野生化豚は、体色は黒色または赤身がかかった横褐色で、鼻は長く、毛は粗毛、前軀・頭部のたくましさは豚というよりイノシシに近い形態になってきている。天敵がいる環境であれば、また違った変化がみられたかもしれないが、このまま長い時間が経過すれば、よりイノシシに近づくことは考えられる。」（「サイボクぶた博物館「ブタの起源」」¹⁹）とのことである。

¹⁷ 猪に豚を交配した一代雑種に代々、豚を交雑して、豚の血量を1/2、3/4、7/8、…と増やしていく実験。

¹⁸ 背脂肪厚や屠体審査得点。

¹⁹ <http://www.saiboku.co.jp/museum/college/buta/kigen/kigen6.html>（2021年2月17日最終閲覧）

(2) 部分的特徴

(ア) 首 《短い》《醜い》

①猪首（いくび）馬足（うまあし）虎背中（とらせなか）（醜い容貌や武骨な体つき。）

猪や豚の首が短いことに関しては、「頸椎はヒトも含めて7個が普通である。（中略）首が長い動物の頸椎は一つ一つが前後に長い。猪首のイノシシは前後に短い。」（「Fukuda, Fumio' World: BoneSkull」）²⁰とのことである。

(イ) 口

①冬至より猪（い）の口（くち）程ずつ日が長くなる／冬至からいの節だけ延びる（冬至を過ぎると少しずつ日が長くなる。）

「猪の口」に関しては、「「猪の口」は、「いの節」の誤解による語。」（北村（編）2012：951）、
「「いの節」は「豕の節」で、豕の足跡を刻というところから時刻に転用したとする説（「和訓栞」）、
「藺の節」で、暈の目のこととする説などがある。」（北村（編）2012：950）とのことである。

なお、酒を飲むための小さな器である「猪口（ちょこ）」は、「「ちょく（猪口）」の変化した語。」
（「ちょこ」『日本国語大辞典 第二版』）であり、「ちょく（猪口）」の「猪口」はあて字。（「ちょく」『日本国語大辞典 第二版』）である。

(ウ) 糞

①人を猪（い）の糞（くそ）に言う（人を散々にけなす。）

猪の糞に関しては、「真新しい猪の糞を調べると、色はこげ茶色でほとんど無臭 繊維質が残っていたので地下茎 種は見当たらず柔らかめの粘土質であった。 とにかく驚いたのは糞の大きさ！ 直径 親指二本分であった 長さは20cm（三分割）」（「イノシシ再来ほか、糞を見る | イノシシと知恵比べ」）²¹、また、「猪の糞 ・猫系にも似たブロック状になっていることがある
・内容物は堅果類ほか獣の体毛など含まれる ・個人的には、糞があるところはけっこう畏で捕獲できる ・臭い」（「糞の特徴」）²²とのことである。

豚の糞の量と臭いに関しては、「ブタは汚濁負荷量（中略）の多い家畜で、1日あたりの排泄量は5.4kg/頭なので、ヒトの4人分（ヒト：1.3kg/人）にあたる。またBOD²³は130g/頭なので、ヒトの8人分（ヒト：13g/人）に相当する。同様にSS²⁴は434g/頭なので、ヒトの14人分（ヒト：52g/人）となる。これは、1万頭規模²⁵の養豚場では人口8～10万人（花巻市の人口にほぼ匹敵）分

²⁰ <http://fukuda-fumio.o.oo7.jp/bone/vertebraeofboar.htm>（2021年2月17日最終閲覧）

²¹ <https://tsuru808088.wordpress.com/2015/02/12/イノシシ再来ほか、糞を見る/>（2021年2月17日最終閲覧）

²² <https://wssleaf.jimdo.com/2018/03/04/野山にある痕跡/>（2021年2月17日最終閲覧）

²³ 環境基準の重要な指標となる生物化学的酸素要求量。

²⁴ 環境基準の重要な指標となる浮遊物質量。

²⁵ 「大規模な企業養豚では10,000頭以上を飼養しているものもある」（「サイボクぶた博物館「日本養豚の歴史」」<http://www.saiboku.co.jp/museum/college/rekishi/rekishi-1.html>（2021年2月17日最終閲覧））とのことである。

の下水処理を行うことと同等といえる。」（押田 2014：174-175）とのことである。

（3）行動

（ア）走る

①猪突猛進（一つのことに向かって向こう見ずに真っすぐに、猛烈な勢いで突き進むこと。）

②後先見ずの猪武者（いのししむしゃ）（ただ強いだけで前後の分別もなく、向こう見ずに突進する武者。思慮分別のない人。）

猪は本当に真っすぐにしか進めないのであろうか。猪が敵に向かって突進する理由に関しては、「イノシシの最大の武器は、下顎から生えている大きな牙です。これはかなり鋭くてまるでナイフのように切れ味抜群なのですが、この武器を最大限に発揮するには、とりあえず相手に接近するしかないのです。一刻も速く接近戦に持ち込むために、先手必勝とばかりに突進してくる（中略）そしてその突進の勢いのまま敵にぶち当たり、牙をつき立てれば、まず必勝間違い無しです。ですから、ひたすら敵を目掛けて走ってくるというわけです。」（佐草 1995：41）とのことであるが、「『イノシシは一度走り出したらひたすらまっすぐにしか走れない』というのは、間違いです。実際のイノシシは走りながらも器用に方向転換できますし、ぶち当たって一撃を食らわせる必要がなくなればちゃんと止まります。」（佐草 1995：41）、「イノシシは、左右を顧みることが可能だし、前後左右、望む方向へ走ることも出来るのである。猪突猛進は、伝説に過ぎない。（中略）「頸が短いから、左右を見ることが出来ない」だの、「イノシシは単純な動物だから、前へ走るしか出来ない」だのイチャモンをつけるのは、はなはだ不当だし、酷というものである。にもかかわらず、人々が「猪突猛進」の語に固執してきたのは、イノシシの猛ダッシュぶりが、よほど印象に残ったからだろう。黒褐色のコロコロとした樽形の肉塊（失礼！）が、藪や林の中から、発射された大砲の弾のように猛スピードで飛び出てきたら、誰だって、度肝を抜かれる。その情景が人々の意識に刷り込みされて、いつしか「猪突猛進」伝説が生まれ、流布していったものと思われる。」（福井 2006：67-69）、「イノシシのイメージといえば「猪突猛進」、これに尽きると思う。しかし、本当にこれだけだろうか。（中略）イノシシは警戒心が強く、普段はなかなか人の前に姿を現さない。その姿を人の前に現すのは、猟師に追いかけているときや、罠にかかったときなどの特別な心理状態や環境に置かれた場合である。とてもイノシシの日常生活では考えられない異常な状況下で観察されていることが、イノシシの行動の代表的なイメージとして定着してしまっているのである。」（江口 2001：172）とのことである。

（イ）掘る 《乱雑》

①ししの掘ったよう（あちこち乱雑に掘りちらしているようす。）

猪は鼻を使って穴を掘る。このことに関しては、「鼻を器用に使って、土中の食物を掘り出し、石や枝などの障害物を押し分け、はねのける。オスならば七十キロ、メスでも六十キロくらいの石なら、鼻先でグッと押せば、簡単に動かせてしまうという。農家の人によれば、イノシシに食い荒らされた田畑は、見事なまでに広く深く掘り返され、何もかもが根こそぎ喰われてしまって

いるので、まるでブルドーザーで掘削工事でもしたかのような有様になるらしい。しかも、イノシシ、田畑の作物が十分に実ったのを見計らって喰いに来る。農家の人にとって、イノシシの襲来は、ほんの数時間でその年の収穫をゼロにしてしまう凶事なのである。一方、イノシシを狙う猟師にとっては、地面に残った鼻先の跡が狩りの重要情報。この足跡ならぬ鼻跡の直径や深さを見れば、これを残したイノシシの大きさがほぼ分かるのだそうだ。」（福井2006：51）とのことである。

猪の鼻の力に関しては、「イノシシは鼻でどのくらいの重さのものを持ち上げられるのだろうか。上下に開閉する扉を開けて餌を獲得する行動を利用し、イノシシの鼻による物体の押し上げ力量を測定した。扉に付けるおもりを徐々に増やしていき、イノシシが鼻で扉を開けられる重さを測定した（中略）二頭の雌イノシシ（五および六歳齢、推定体重六〇kg）を供試した。試験の結果、成雌（体重六〇kg）二頭の鼻による押し上げ力量の記録はそれぞれ六〇・〇kgおよび五七・五kgであった。これは雌の飼育イノシシの結果である。野生の雄個体であればより重い物を押し上げられると考えられる。」（江口2001：187-188）とのことである。

豚の鼻の力に関しては、「豚の鼻力量測定装置」を試作し実験した結果、「最高鼻力量は73.3kg」（美斉津ほか1980：13）であったとのことである。

人間は、豚が穴を掘ることを利用してきた。このことに関しては、「豚は、その鼻先で地面を掘り、土の塊を崩して地中の虫や木の根株も食うので、古代エジプトでは飼いや馴らされた豚は、土地を耕すのにも使われた。また、ギリシアの歴史家ヘロドトスは、エジプトで豚は脱穀にも使われたと言っている。豚は、古代エジプト人はもちろん、ケルト人やゲルマン人ばかりか、古代ギリシア人、ローマ人でも、放牧用の土地を開墾するのに便利な動物だった。豚の土を掘り返す習性は森林の土壌をおおいに変える。豚は、樫、ブナ、ハシバミなどの種を食い、若木を根こそぎにして食うので、豚を放ったのちの土地は、大きな木は育たず草ばかりになる。豚はまた、地中の昆虫やミミズ、ナメクジなどを食うほか、ネズミの巣を掘り出すこともしたので、放牧地の開墾整地に便利なことから、犬を使って羊飼いをすると同じように、犬を使って豚飼いをする人たちもいた。新約聖書には、土地を開墾しているのだろう豚飼いの人たちが何度となく登場している。」（江口2003：160-161）とのことである。

猪や豚の鼻の構造に関しては、「鼻そのものの筋肉（鼻筋）という意味では、ブタはほとんど発達していないという（加藤1974a²⁶）。しかし、鼻骨の先端の切歯骨とのあいだに噴鼻骨とよばれる小さな三角プリズム型の骨があり、これがブタの鼻を自在に動かし大きな力を発揮させるのに役立っているようだ。」（田中2001：45）とのことである。

豚の嗅覚など感覚に関しては、「多くの動物は、ヒトに比べて嗅覚と聴覚が優れ、視覚は劣っているが、ブタも例外ではなく嗅覚と聴覚が優れている。」（田中2001：58）、「ブタは音に対して注意を向けるとき、耳をそばだてるというよりは、むしろ顔全体を動かして音の方向に定位する。このように、耳そのものは敏感に動くわけではないが、聴覚は非常によく発達している。」（田中

²⁶ 加藤嘉太郎. 1974a. 家畜比較解剖図説（上巻）[増訂改版第8版]. 養賢堂, 東京.

2001:62)、「ブタ自身の特有の匂いという点については、さまざまな器官で産出されるフェロモンによるところが大きい。ブタにかぎらず多くの哺乳類では、雌雄間の性的な行動連鎖には匂いの情報が重要である（森 1993²⁷）。雌が発散するフェロモンは雄を明らかに誘引するし、雄性ホルモン活性の結果として雄の生殖腺や唾液腺から分泌されるフェロモンは、雌にとって魅力的なものである。また、去勢しないで育成された雄ブタの肉に特有な、いわゆる牡臭といわれる匂いもこれによる（Signoret *et al.* 1975²⁸）。なお、トリュフにはこの雄ブタの性フェロモンと同様の物質が含まれていることが確かめられており、ブタがトリュフを簡単に探しあてる秘密はそこにあるらしい。ブタ自身が発散する匂いは、雌雄の性的な情報交換ばかりでなく、たがいの認識においても大いに役立っている（Meece *et al.* 1975²⁹; Houpt and Wolski 1982³⁰）。初対面のブタどうしは必ず匂いを嗅ぎ合い、声や姿などほかの情報とあわせて個体識別をしている。ブタの優れた嗅覚能力は、トリュフの収穫ばかりでなく、麻薬捜査にも役立っている（Kilgour and Dalton 1984³¹）。」（田中 2001:64-65）とのことである。

（ウ）食べる 《乱雑、騒々しい》

①豚（ぶた）が雑炊を食っているよう（騒々しく食べて、行儀の悪いようす。）

猪や豚の食性に関しては、「イノシシは雑食性であるが、植物質のものを多く食べる。ブナ科の広葉樹の堅果ドングリを好み、クリの実・キノコのほか、地中のヤマノイモ・竹の子・ワラビ根などを掘って食べる。栽培作物のイネ・サツマイモ・豆類・サトウキビなどを子連れで食べ、被害を与える。動物質のものでは、ネズミ・ヘビ・カエル・昆虫類・サワガニ・ミミズなどを食べる。パイナップルの新芽も食べるが、肥料を与えるとミミズが増え、これを食べるためイノシシが根を掘り起しパイナップルをダメにする。肥料を施した芝生も、発生するミミズをイノシシが食べるため、ブルドーザーを掛けたように荒される。谷間のワサビ畑ではサワガニを食べるため、石を掘り起しワサビに被害を与える。臭覚がするどいので雪の下の地中のものまで掘って食べるというが、これは積雪量が三〇cm以下の場合と思われる。なお、好物のサツマイモは掘り集めてカヤなどをかぶせ貯蔵する習性をもつ。」（矢ヶ崎 2001:135-136）、「大形動物の死肉を食べるなど、かなりの悪食である。」（「イノシシ」『日本大百科全書（ニッポニカ）』）、「残飯や人間の排泄物でも食べる。」（福井 2009:86）、「近年でも、東アジアでは豚の飼育場の上が人の大便所になっていたところがあるように、古代でもそうだったと思われる。豚は雑食動物で、人の排泄物でなれど、どんなに汚いものでも与えられれば食べるし、汚泥のなかでも転げ回る。そういう飼

²⁷ 森裕司. 1993. 動物の行動と匂いの世界. 化学と生物 31:714-723.

²⁸ Signoret, J.P., B.A. Baldwin, D. Fraser and E.S.E. Hafez. 1975. The Behaviour of Swine. In: (E.S.E. Hafez ed.) *The Behaviour of Domestic Animals*. 3rd ed. pp.295-329. Bailliere, Tindall, London.

²⁹ Meece, G.B., O.J. Conner and B.A. Baldwin. 1975. Ability of the pig to distinguish between conspecific urine samples using olfaction. *Physiol. Behav.* 15:121-125.

³⁰ Houpt, K.A. and T.R. Wolski. 1982. *Domestic Animal Behavior for Veterinarians and Animal Scientists*. 1st ed. Iowa State University Press, Iowa.

³¹ Kilgour, R. and C. Dalton. 1984. *Livestock Behaviour*. 1st ed. Granada, London.

い方だと、豚は非常に不潔ということになる。³²」（江口2003：166）とのことである。

（エ）猿を追う 《無駄》

①しし猿を追う（無駄なことに忙しく日を過ごす。）

猪と猿の関係に関しては、「鹿とかイノシシといったものとの関係をみますと鹿や猪はサル生態をうまく利用しているのです。というのは、サルの群れは木から木へ飛び移りながら木の実を食べていくわけですが、たくさん食べかけの実を落としますし木を揺すれば実が落ちます。すると地上で生活しているイノシシや鹿は、それら落ちてくるおぼれを食べて歩くのです。これはなかなか得難い食料なのです。同時に、樹上で異変が起これば危険信号となって鹿やイノシシも逃げます。逆に地上での肉食獣の接近は樹上にいるサルへの警戒警報にもなるといった、お互いの信号、情報が共有、利用できるわけです。そういう意味で信頼関係が生まれやすいといえます。」（『厩猿信仰』³³）とのことである。猪が猿を追うのは、決して「無駄なこと」ではないようだ。

3 終わりに

猪や豚は日本人にとって身近な動物である。猪には古くからさまざまな形で接しており、また、豚も特に明治以降食肉として身近に接してきた。猪や豚の特徴的な姿形や行動などがことわざに描き出されている。

猪や豚は、世界中に生息し、また飼われている。『世界ことわざ大事典』（柴田ほか（編）1995）によると、さまざまな言語や文化圏に、猪や豚に関することわざがある。日本のことわざと捉え方が共通しているものとしては、「豚の口元に金をつけるな（豚に真珠）」（スリランカ）、「豚のように食べ、犬のように凝視する（行儀が悪い）」（メキシコ）、「坂を転げ落ちる豚よりも醜い（とても醜い）」（アルゼンチン）などがある。日本のことわざとは異なる独自の捉え方をしたものも多く、「豚のしっぽに絡みつくとくれ（豚のしっぽは放っておくと土が絡みつき大きな塊となって取れなくて難儀する。仕事はすぐに片付けないと溜まってしまっとうしようもなくなる）」（タイ）、「豚の皮で顔を隠す（「顔」は名誉のことで「豚の皮」は汚名のこと。恥ずべき行為をした者は、自己正当化のために、あれこれ口実を並べたてる）」（インドネシア、マレーシア）、「鷺鳥と豚のように暮らす（いがみ合って暮らす）」（ウクライナ）、「豚のしっぽよりも曲がっている（悪運に見舞われる）」（中央アメリカ）、「豚の腹をかいてやる（人にへつらう）」（中央アメリカ）などがある。

以上、本稿では、「猪」「豚」に関することわざを示しながら、「猪」「豚」に対する見方や捉え方の特徴を見た。

³² なお、これに続いて次のような記述がある。「そういうわけで、エジプト王ファラオは、豚にはいつまで経っても消えない不浄の烙印があるとして、豚を食べること、飼うことを禁じたのだ。（中略）この古代エジプト王の豚肉食禁制は、ユダヤ人に影響を及ぼした。」（江口2003：166-168）とのことである。

³³ http://www.city.oshu.iwate.jp/hm/ushi/07_tomo/mayazaru/03_sannohe.html（2021年2月17日最終閲覧）

参考文献

- 赤星心（2001）「第11章 イノシシのまち——丹波篠山」高橋春成（編）『イノシシと人間——共に生きる』古今書院、pp. 290-313
- 石島芳郎（2006）『十二支の動物たち』東京農業大学出版会
- 江口保暢（2003）『動物と人間の歴史』築地書館
- 江口祐輔（2001）「第6章 イノシシの行動と能力を知る——現代の攻防最前線」高橋春成（編）『イノシシと人間——共に生きる』古今書院、pp. 171-199
- 押田敏雄（2014）「12. 養豚の環境問題とふん尿処理」鈴木啓一（編）『ブタの科学』朝倉書店、pp. 168-185
- 北村孝一（編）（2012）『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』小学館
- 黒澤弥悦（2001）「第1章 イノシシとブタ——人とのかかわりを通して」高橋春成（編）『イノシシと人間——共に生きる』古今書院、pp. 2-44
- 佐草一優（1995）『ウソ・ホント？ 動物ことわざ事典』ビジネス社
- 柴田武、谷川俊太郎、矢川澄子（編）（1995）『世界ことわざ大事典』大修館書店
- 鈴木啓一（編）（2014）『ブタの科学』朝倉書店
- 高橋春成（編）（2001）『イノシシと人間——共に生きる』古今書院
- 田中智夫（2001）『ブタの動物学』東京大学出版会
- 仲谷淳（2001）「第7章 知られざるイノシシの生態と社会」高橋春成（編）『イノシシと人間——共に生きる』古今書院、pp. 200-220
- 新津健（2011）『猪の文化史 考古編—発掘資料などからみた猪の姿—』雄山閣
- 馬場俊臣（2010）～（2020）「「牛」に関することわざ」「虎」に関することわざ類」「兎」に関することわざ」「龍」に関することわざ」「蛇」に関することわざ」「馬」に関することわざ」「羊」に関することわざ」「猿」に関することわざ」「鶏」に関することわざ」「犬」に関することわざ（1）」「犬」に関することわざ（2）」『札幌国語研究』15～25、北海道教育大学国語国文学会・札幌
- 濱田陽、李珣淑（2015）「日本十二支考〈猪〉〈鼠〉〈牛〉現代文化篇」『帝京大学文学部紀要 日本文化学』(46)、帝京大学文学部日本文化学科、71-95
- 福井栄一（2006）『イノシシは転ばない ～「猪突猛進」の文化史』技報堂出版
- 美斉津康民、河上尚実、八木満寿雄、瑞穂当（1980）「豚の生態行動に関する研究 II 豚の鼻力について」『日本養豚研究会誌』17(1)、日本養豚学会、pp. 7-15
- 矢ヶ崎孝雄（2001）「第5章 猪垣にみるイノシシとの攻防——近世日本における諸相」高橋春成（編）『イノシシと人間——共に生きる』古今書院、pp. 122-170
- 『日本国語大辞典 第二版』（ジャパナレッジ版）
- 『日本大百科全書（ニッポニカ）』（ジャパナレッジ版）

付記 本稿は、令和元年度北海道教育大学札幌校公開講座「文学に見られる動物たち（Ⅷ）—猪— 第3回 日本語と猪」（令和元年9月28日）の講演資料の一部に修正を加えたものである。